

看取り

～本人の意向に寄り添って～

施設名：サン・ラポール南房総
発表者：明星 翔



事例概要

- 氏名：S様(仮名)
- 基本情報：老衰、嚥下機能低下、高血圧
- 経過：
 - ①2022年～：訪問歯科による継続的な口腔ケア。
 - ②2025年5月：入院を経てADL低下、経口摂取困難(DIV管理へ)。
 - ③2025年6月：看取り期へ。



課題(アセスメント)

1.身体的課題:

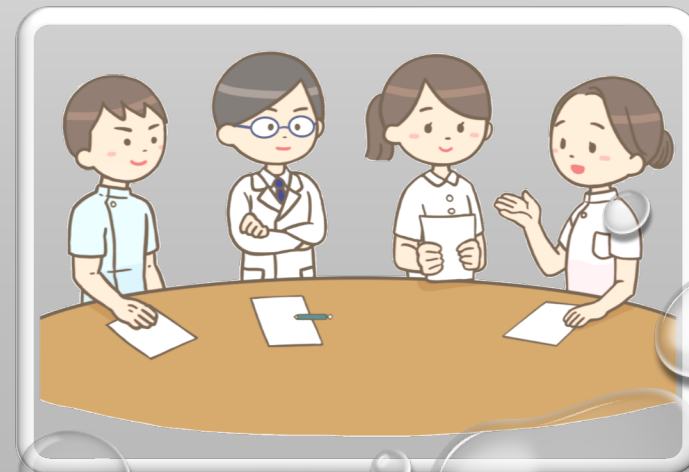
嚥下低下に伴う口腔内の不衛生、感染リスク、皮膚の脆弱化。

2.生活の課題:

表情の変化が乏しくなる中でのコミュニケーションの維持。

3.家族の課題:

状態悪化に伴う不安へのサポート。



ケアの実践

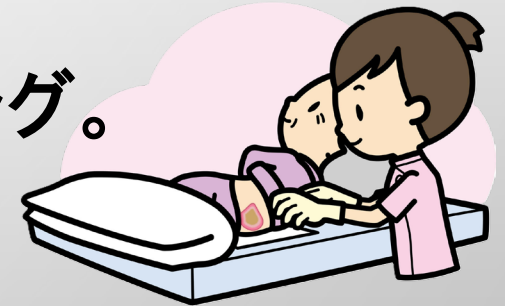


1.口腔ケアの継続:

歯科・看護師と連携し、低刺激な清拭と保湿を徹底。「不快感の除去」を最優先。

2.身体的安楽の追求:

仙骨部褥瘡痕の保護(カテリープ使用)と丁寧なポジショニング。



3.家族への情報共有:

電話での詳細な経過報告。「声掛けへの反応」など日々の様子を共有。

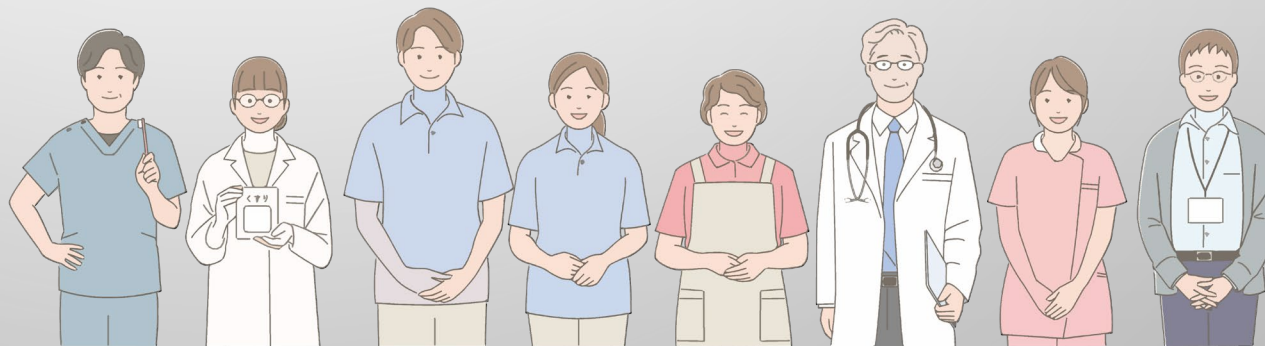
結果・考察

- ・ 結果：2025年7月、S様 苦悶表情なく穏やかに永眠。
- ・ 考察：
 - ①口腔ケアは、本人の尊厳を守るだけでなく、面会する家族の安心感（グリーフケア）にも繋がった。
 - ②「声掛け」への小さな反応を逃さず、チームで共有することの大切さ。

介入の引き算

心の足し算

生活者としての視点の
重要性



事例概要

- 氏名：I様(仮名)
- 基本情報：前立腺癌(疑い)、腎機能低下、貧血
- 経過：
 - ①2025年1月：インフルエンザから衰弱し入院。「部屋に帰りたい」と強く希望し退院。
 - ②2025年2月：居室にて看取り期へ。



本人の意向と葛藤

①強い自己決定:

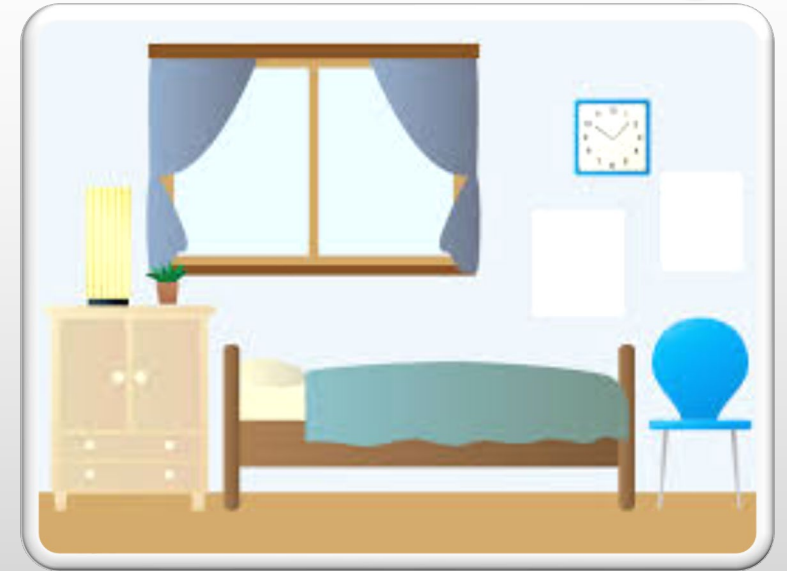
「病院はもういい」「自分の部屋で過ごしたい」。

②状態の変化:

全身の痛み、倦怠感、食事摂取量の低下。

③スタッフの苦悩:

医療的ケアの必要性と、本人の拒否の狭間での調整。



ケアの実践

1. 意向を汲んだ環境整備:

- ・病院ではなく施設内でのDIV管理を選択。
- ・大好きなコーヒーを飲むなどQOLを優先。



2. 拒否に対する柔軟な対応:

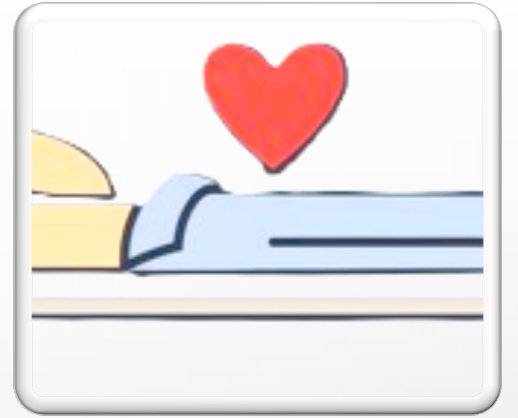
- ・無理強いせず、タイミングを見計らった介入。
- ・多職種での役割分担(副館長・ケアマネ等)。

3. 家族との合意形成:

- ・弟様夫妻へ「施設での看取り」の覚悟を丁寧に共有。



結果・考察



- ・結果：2025年2月、本人の望んだ場所で静かに永眠。

- ・考察：

①「治療の拒否」を単なる拒絶と捉えず、その裏にある「居室への愛着」に光を当てることができた。

②「ここで良かった」というI様の一言が、チーム全員の自信に繋がった。